

# 住民参加によるまちづくりへのタウントレイル手法の適用に関する研究 西村 幸夫

## — 飛驒古川を事例として —

### 第1章 研究の目的と方法

本研究は、住民参加によるまちづくりの手法を検討するために、イギリスで広く行なわれているタウントレイルという手法を考察し、実際にタウントレイルの設計を試みたものである。本研究で事例に挙げた岐阜県古川町は、飛驒高山の北西約10kmに位置する小都市で高山とよく似た都市構造を有している。しかしながら、高山が歴史的環境の保存・修景に力を注いでいるのとは対照的に、古川では飛驒の匠の技術を受け継いだ大工と確かな目を持った住民によって歴史的な町並みに調和した現代の町家が創造され、独自のまちづくりが進められている町である。1986年度にはこの古川の都市構造を明らかにし、住民の意識を勇気付け、更に、今後のまちづくりの方向を提案するための調査が、財団法人観光資源保護財団（現（財）日本ナショナルトラスト）によって行なわれ、『飛驒古川の町並みまちづくり』という報告書がまとめられた。この報告書では、環境改善のための様々な段階での具体的な提案が示されている。なお、本研究のメンバーは、調査に携わった調査員と地元のまちづくりの若手リーダーによって構成されている。

調査後、5年を経て報告書に示された幾つかの提案が町に採用され、実現した。更に、古川町が独自に行なった大規模なプロジェクトが形を現わすとともに、地元のまちづくりの若手リーダーたちはそれらの企画運営に加わるという展開をみせていた。報告書に示された、いわばハードの部分が実現していくのに対して、古川の住民の意識を勇気付けるといったソフトの部分に対応するプログラムが必要になってきている。大規模なプロジェクトを見学に訪れる観光客から古川の町の美しさについて言及され、誇りを持つようになるということもあるだろうが、住民が自発的に活動し、更に、確かな意識を獲得していく方向が望ましい。そこで新たなステップとして、自らの環境に対する高い意識を自覚し、また、次の世代へつないでいくために、イギリスで行なわれているタウントレイルという手法の導入を試みた。タウントレイルとは第3章で詳しく述べるが、地域の歴史や文脈を踏まえた上で、住民が町歩きを行なうことによって環境を点検し、身の回りに起こりつつある変化を認識していく活

動の1つで、その成果は地図やリーフレットにまとめられる。また、子供たちの環境学習の教材や古川町を訪れる観光客のためのガイドブックとしても用いられているものである。更には、この活動を通して住民は自らが居住する地域に誇りや愛情を再認識することになる。イギリスでは住民が主体となって住環境を向上するための様々な活動が行なわれており、それらはシビック・トラストなどの全国組織に支援されている。社会システムなどの条件は異なるものの、全国各地でまちづくりのための団体が様々な活動を展開しているわが国においてもその手法や理念には学ぶべき点が多いと考えられる。

本研究は、次の方法によって行なった。

1. 前回調査を総括する  
報告書の内容をまとめ、前回の調査で提案した部分について何が実現され、何が残されたかを整理する。また、その後の情勢の変化により古川町が新たに展開している大規模プロジェクトによる環境の変化を把握する。
2. タウントレイルの事例を調査する  
古川にふさわしい手法を検討するために、イギリスで行なわれているタウントレイルの事例を文献資料によって収集、分析する。
3. タウントレイルを設計し、リーフレットを制作する  
実際にタウントレイルのリーフレットを制作し、設計コンセプトと作業を通じての問題点などをまとめる。
4. タウントレイルの活用を提案する  
子供たちや観光客などの参加など、タウントレイルの活用の方法を検討し、提案する。
5. 住民参加のまちづくりにおけるタウントレイルの可能性を考察する  
更に古川の事例を敷衍化し、広くまちづくりにおける住民参加のあり方に関する提言を行なう。

### 第2章 前回調査の総括

#### 2-1 前回調査の内容

1986年に行なった調査は、歴史的な文脈を踏まえた上で調査員が町歩きを行なって古川の美しい景観など、町

の財産となるべきものを示すとともに、まちづくりの課題を抽出した。そして、それらの財産を支える高い技術を持つ大工たちと用水やまつりを支える住民意識を明らかにした。更に、都市構造を強化するために問題点を整理し、広場の修景や装置の改善など様々な提案を行なった。この報告書の特徴は、次の3つである。

1. 第5章は、C.アレグザンダーのパターンランゲージのように短い言葉で報告書の内容が要約され、提案についてもまとめられていること。
2. 提案に21ページという多くのページを割いていること。
3. なるべく多くの人々に読んでもらえるように「ちえのすけ」と「たかこ」という2人の子供のキャラクターが報告書の中に登場し、古川の町を案内するという構成をとったこと。

この報告書は住民や大工などに配られ、また、ダイジェスト版が「ちえのすけ・たかこの古川町歩き」として『北飛ニュース』1988年1月1日号に掲載されるなど、多くの住民の目に触れる結果となった。

## 2-2 受け入れられた提案

報告書で提案した内容は大きくまとめると次の5つである。①個々の建物に適用できるルールブックを確立すること、②古川の大工の仕事を積極的に町並みづくりに生かしていくこと、③屋台蔵などの町角の改善、④眺望地点の発掘と強化、⑤古川の都市軸としてのタテ軸とヨコ軸の強化、⑥三寺スポットの改善(図1)。

特に都市軸の強化については、約80の細かい提案を行なっている。そして、調査後5年を経てこの中から幾つ

かが実現した。

### 1. 飛驒の匠文化館

まず、1989年10月に「飛驒の匠文化館」が完成した。この建物は提案のうち、②古川の大工の仕事を積極的に町並みづくりに生かしていくこと、⑤古川の都市軸としてのヨコ軸の強化、⑥三寺スポットのうち円光寺スポットの改善として、報告書では12ページを割り、調査員の吉田桂二氏が具体的な施設提案を行なったものである。土地は古川町が提供、建物は(財)日本宝くじ協会の助成金を受け、(財)観光資源保護財団(日本ナショナルトラスト)が建設した。現在は、建物が町観光協会に有償で貸与され、管理運営が行なわれている。内容は大工道具や木の展示と集会施設である。建設に当っては、それまで独立して仕事を行なっていた大工の棟梁たちが企業連合体を作り、技術を競い合い、交流したと聞いている。また完成した建物は大工の仕事のショールームともなり、見学者から「このような住宅を建ててほしい」というような声が上がっている。木造の技術者や研究者にも紹介され、年間1万5千人の見学者がある。また、吉田桂二氏は、飛驒の匠文化館の設計で1991年度の吉田五十八賞特別賞を受賞した。

### 2. 瀬戸川弁財天堂

1989年3月に古川町が、瀬戸川用水の旧水門跡の空地に弁財天堂とスポット公園を整備した。これは、③屋台蔵などの町角の改善、⑤古川の都市軸としてのヨコ軸の強化、⑥三寺スポットのうち本光寺スポットの改善として報告書では具体的なイラストを示して提案したもので現在は町中に不足しているオープンスペースとして住民に親しまれている。

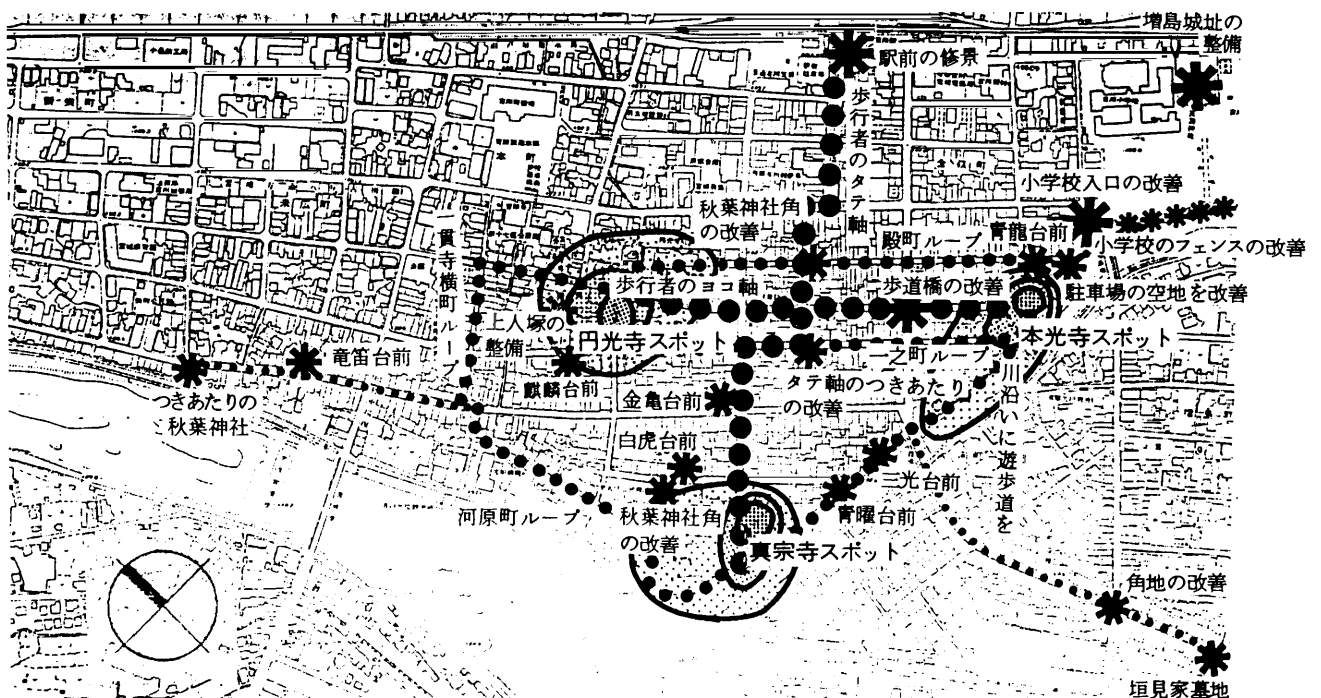


図1 提案プロジェクトのダイアグラム

### 3. 「雲」

雲とは建物に付けられている装飾の施されている腕木のことで、戦後古川大工の間に広まったといわれ、大工はそれぞれ1つから複数の型を持ち、自分の作品のサインにもなっている。新築の住宅に付けられるので、現在では町並みに統一感をもたらしている1つの要因ともなっている。報告書ではこの雲に注目し、調査対象地区の雲マップを作成した。それまで、古川の人々は雲が付いていることは当たり前であって特に注意を払うということとはなかったが、飛驒の匠文化館には雲が採用され、古川大工のシンボルとして取り上げられるようになり、雲の付いている住宅が年々増えている。また、最近では町角のサインや商店会の装飾にも採用されている。

### 4. その他の提案

上記3点のほかにも、様々な段階で提案が受け入れられた。例えば、周辺住民が管理組合を作って瀬戸川の掃除を行なっているが、掃除用具や青いポリバケツが1日中放置されていた。調査後、木製のカバーが付けられるなど注意が払われるようになった。また、古川町が行なった「起し太鼓の里整備事業」の一環として上人塚の整備や瀬戸川の修景が採用されている。更に、瀬戸川沿いの電柱撤去を検討中である。また現在、景観的に問題になっていた瀬戸川上の歩道橋が撤去され、地下道建設工事が進んでいる。

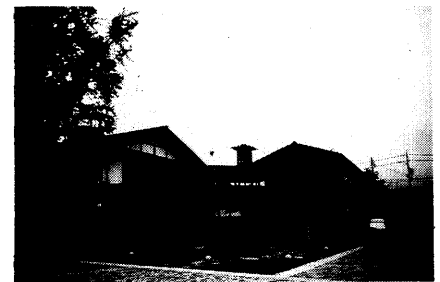
### 2-3 その他の変化

このように、古川の町は急激に変化していった。このほかにも、駅裏で郷土民芸館や飛驒の山樵館を含む「語りべの里整備事業」、そして、飛驒古川まつり会館やまつり広場、そして瀬戸川の整備なども含めた「起し太鼓の里整備事業」、これら2地点をつなぐ白壁土蔵風の跨線橋の建設という大規模な、また、景観にも大きな変化を与

えるプロジェクトが1992年6月に完成している（写真1～4）。更に、現在では駅前再開発を検討中である。また、競い合うようにして「雲」の付いた住宅の新築が増え、酒造業者が蔵の修景や町角に杜氏の像を建てるなど住民の間でも自発的な活動が続いている。この結果、あまりにも町が急激に変化していったために景観についてのルールブックの必要性も検討されるようになってきている。

報告書の提案がこれほど短期間に受け入れられた要因を考えてみると、①報告書の内容が多くの人目に触れたこと、②提案が具体的であり、図や文章で詳しく説明したために説得力があったこと、③郊外部の整備を一段落させていた町が市街地の整備プログラムを求めていること、④地元の調査委員が若手のまちづくりのリーダーとしてこれらの実現の推進役となっていったこと、⑤「古川やんちゃ」にみられるように、コミュニティを基盤としたいいいことはなんでもやっという古川の人々の持つ気質、が挙げられるだろう。

しかし、また同時にこれほどの急激な変化を住民が自覚し、今後のまちづくりの方向を見いだしていくための働き掛けを本研究メンバーは検討してきた。そこで、町歩きによって変化していく環境に注意を払うことができるようなタウントレイルの導入を検討した。



写1 飛驒の匠文化館



写2-1 修景前の瀬戸川



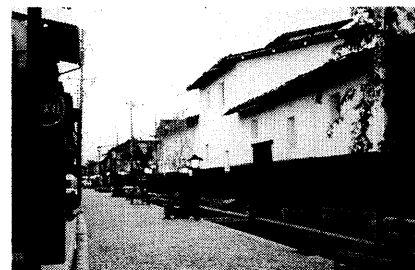
写3-1 修景前の瀬戸川と堀川通り



写4-1 建設中の弁財天堂



写2-2 現在の瀬戸川



写3-2 現在の瀬戸川と堀川通り



写4-2 弁財天堂と修景された堀川通り

### 第3章 タウントレイルとは何か

#### 3-1 「トレイル」の意味と種類

「トレイル」(“Trail”: 英語, 一般名詞)という言葉は辞書によると,

1. 引きずった跡, 通った跡。
2. (荒野などで)踏みならされて, あるいは馬車などが通ってきた道, (山中・森林などの)目印された小道。  
・以下略。

とあり, 何かの通った跡や道といった意味である。

一方, アメリカやイギリスには, 山道などの自然を歩く Nature Trail, 歴史的な街道や先人たちの足跡を歩く Historical Trail, 遺跡や遺構を巡る Heritage Trail, 歴史的な町並みを巡る Town Trail, ボストンの独立運動の歴史をたどる Freedom Trail など, 様々な「トレイル」があり, ガイドブックやリーフレットなどが作られている。

これらの事例の使われ方と辞書による意味を考え合わせると, 「トレイル」とは, 「なんらかの歴史的な痕跡をたどりながら, コースに沿って巡ること, また, そのコース」を指すと考えられる。そして, その歴史的な痕跡が山道の場合には Nature Trail, 街道や先人の足跡なら Historical Trail, 遺跡なら Heritage Trail, 歴史的な町並みなら Town trail となるのである。

「トレイル」をこのように広く解釈すると, 日本でも同様のことが数多く存在していることがわかる。古くは, 霊場巡り, 名所巡り, 七福神巡りなどがあり, 近年では, 散策路, 観光コース, 自然遊歩道, ウォークラリーなどの地域の歴史的な遺産を巡るようなコースが, 全国各地で作られている。そこでここでは, イギリスやアメリカに実在する“..Trail”だけでなく, 上記のように意味を解釈して日本の事例までも含んだものを広義の「トレイル」として考えていくことにする。

これらの「トレイル」は歴史的に徐々に出来てきたものも, 近年になって散策や観光のガイドのために作られたものもあり, また, 作り手も個人から, 住民団体, 自治体などまで多種多様である。しかし, いずれも歴史的なコンテキストをテーマにしていることは共通している。

タウントレイルは歴史的なコンテキストを紹介しながら, 町を巡るコースであり, 「トレイル」の一種に位置づけられる。しかし, タウントレイルは, 主にイギリスにおいて, 地域の住民活動に関係して発達してきた経緯があり, それらの事例や背景を考える必要がある。

#### 3-2 イギリスの事例の紹介

イギリスのタウントレイルは, 1991年現在, イングラ

ンドだけで, 少なくとも611の町で946例作られている。

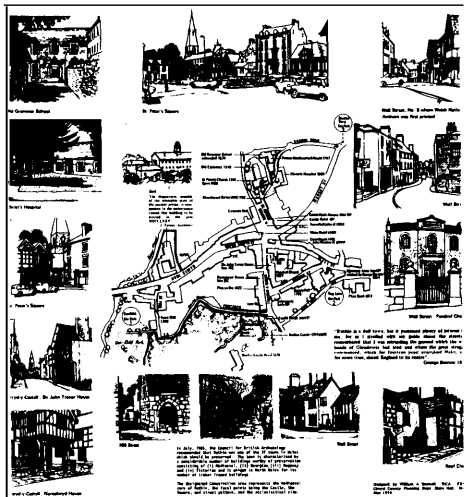
(出典: English Heritage Monitor, English Tourist Board and British Tourist Authority, 1991, p.63) これらのタウントレイルの作り手は, 住民団体, 自治体, 地方出版社など様々であるが, その中で「ローカル・アメニティ・ソサエティ」と呼ばれる住民組織によって作られているものが特徴的である。

「ローカル・アメニティ・ソサエティ」は, 自分たちの生活環境をよりよくしていこうとする地域住民の集まりであり, 1950年ころから全国各地の町に作られた。この組織は, 全くの住民有志による団体で, 歴史的な建造物, 遺跡の保存キャンペーンや実際の修復, 修景を行ったり, 地域の問題点や開発許可申請をチェックして行政に改善を促したり, 住民の地域理解に対する啓蒙活動をしたりと非常に様々な活動をしている。タウントレイルはこうした活動の一環として行なわれている。ここでのタウントレイルは, 成果品のリーフレットが来訪者や環境教育の教材となるだけでなく, 住民自体が作っているために, 作成過程で自分たちの町を歩くことによって, 町の再認識をするきっかけとしている点の特徴的である。

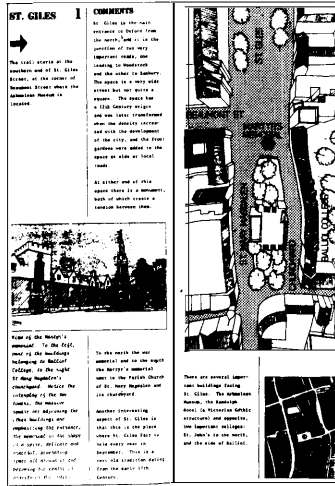
イギリスのタウントレイルの事例を簡単に分類すると, まず作成者別では, a. ソサエティ, b. 自治体(カウンシル), c. 大学や研究所, d. 地方出版社となる。体裁別では, a. 1枚の紙を折ったもの, b. 小冊子があり, 内容別では, a. 歴史や建築の一般的な紹介, b. 建築意匠などの細かいテーマの解説, c. ストーリー形式, d. 設問形式に分類できる。

この分類をもとに, 幾つか事例を紹介する(図2)。

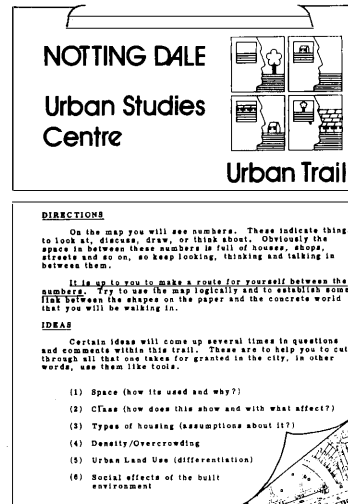
- ① ウェールズ北部の人口4,000人余の町ルシンのタウントレイルで, シウド・カントリー・カウンシルという自治体で作成したもの。四折り紙1枚の簡単なリーフレットだが, 地図とスケッチがコンパクトにうまくレイアウトされている。
- ② テムズ川のロンドン上流のスタインという町のソサイエティによる一般的なスタイルのタウントレイルで, 小冊子の体裁に, 建物1軒1軒の解説が詳しくされている。
- ③ 大学都市オックスフォードの, オックスフォード・ポリテクニクという大学が作成したトレイル。オックスフォードは600-700年にわたる建築造営の歴史があり, 様々な様式の建築が現存するため, トレイルもゴシック, 近代建築などのテーマ別に幾つかのトレイルが作られている。取り上げた事例は町中の小空間などの都市空間をテーマにしたものである。
- ④ ロンドン西部のノッチングム・デールにある都市研究センターが作成した問題提起型トレイル。高速道路や中高層住宅建設などの問題の多い地区で, 子供たちに



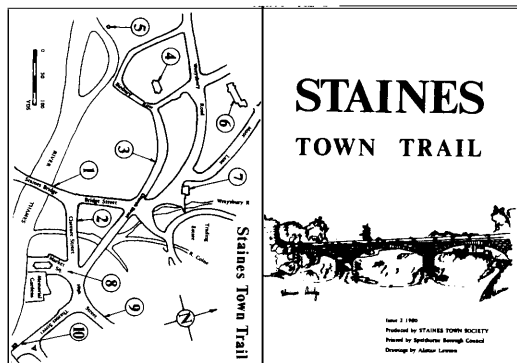
①ルシンのタウントレイル冊子  
'A Walk Around Historic Ruthin'



③オックスフォードのタウントレイル冊子  
'Oxford Town Trail-urban places'



④ノッティング・デールのタウントレイル冊子  
'Notting Dale/Urban Trail'



②スタインのタウントレイル冊子 (表紙: 左と本文: 右) 'Staines Town Trail'

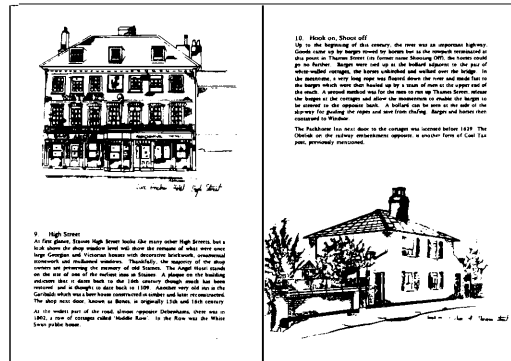


図2 様々なタウントレイル

「どのようなまちづくりが望ましいのか」を問うている。例えば、「問2、(近くにある高速道路の高架インターを見て)—— a. こうした高速道路はロンドンやマンチェスターのような古い都市内部に必要ですか？それはなぜですか？ b. だれが便利になるのでしょうか？ c. なぜ高速道路はこの地区を横切っているのでしょうか？」

### 3-3 日本での取り組み

日本にもイギリスのタウントレイルと同様のものとして、住民有志による地図から、自治体で作った散策路、観光ガイドブックのコースまで様々なものがある。その中で、東京都の「歴史と文化の散歩道」などの自治体による散策路が、最近顕著に作られている。

自治体による散策路は、町の文化財や公園などの既存のコンテクストを巡りながら、町の歴史や構造を説明するという点で、「タウントレイル」の範疇に含まれるが、イギリスのものとは、作られ方が住民主体ではなく、自治体主導である点で異なる。日本では近年になって、地

域の歴史的な資源を大事にしようという考え方が広まり、それを自治体が施策に取り入れて、こうした散策路が作られるようになったと考えられる。また、作り手が自治体であるために、散策路と同時にサイン計画や道路整備を行なう事例も幾つかある。

一方、住民が環境を点検しながら町を歩くことで、行政に問題の改善を提案するという、イギリスのタウントレイルのもう1つの側面については、日本では散策路のコースを作るのとは全く別に、武蔵野市の町並みウォッチングなどで試験的に行なわれている。こちらも現在のところは行政主導型であり、住民の自主的な活動として定着するにはもう少し時間がかかるであろう。

日本ではイギリスほど住民活動は発達しておらず、日本での取り組みは現状では自治体主導型である。しかし、今後住民が自分の町に対する関心を強く持つようになれば、自治体と共同、あるいは住民組織が自主的にタウントレイルを作っていくことが予想される。そして、タウントレイルを作ることを契機に、更に、多くの人のまちづくりへの意識が向上していくことが期待される。





- ・婦人会や子供会,PTA のイベントに利用する
- 2. 環境学習の教材として活用する
  - ・中学生・高校生に利用してもらうために、1 クラス分のリーフレットを各中学校・高校に配布する
  - ・古い町を訪れる修学旅行生に利用してもらうために、観光協会や旅行会社に配布する
- 3. 古川を紹介するためのマニュアルとして活用する
  - ・ボランティアの観光ガイド「夢ふるさと案内人」のマニュアルとして利用する
  - ・商店や旅館の経営者に利用してもらうために商工会で説明会を開催する
  - ・他市町村の視察の説明に利用する

リーフレットはタウントレイルのために作成したが、町の歴史や都市構造、まちづくりの理念などに触れているために、古川の町のガイドとして十分通用すると考えられる。そして、上に挙げたプログラムが町の中で同時並行的に進行していったら、できるだけ多くの住民が町歩きを体験することによって、現在固定化しているまちづくりの活動メンバーを増やすこともできると考えられる。また、町歩きを重ねることによって、違う視点から第2、第3のトレイルが生れてくるだろう。このような活動を通じて、これからのまちづくりを担う世代が育てば望ましい。

## 第6章 タウントレイルの可能性

### 6-1 研究者と地元の共同作業の可能性

タウントレイルの設計を通じて、前回調査以上に研究メンバーの間で緊密なコミュニケーションが交わされ、信頼関係が育まれた。一般の調査では、よそ者である研究者が専門家として町の現況を把握し地元の意見を聞きながら提案を行なうが、そのために研究者側からの発信だけで終わってしまいがちである。また、報告書をまとめる作業に大部分のエネルギーが割かれ、調査後に報告書の中身が検討されることは少ない。今回は報告書を地元とじっくり検討し、研究者側の間違いなども指摘してもらうことができた。また、研究者と地元のメンバーとでは重要だと考える部分に対する評価が異なる場合が出てくる。その中には地元に住んでいることから生れてくる愛着などによるものも多いが、実は大きなキーワードが隠されていることもある。全体の目的を見失わないようにそれらの調整を図りながら、町の姿を把握する作業が必要になる。このような作業を円滑に進めるには互いの信頼関係が必要であろう。タウントレイルは、調査などで築かれた研究者と地元の信頼関係をベースとした次のステップとして、共にまちづくりの活動に参加するのに有効な手法であると考えられる。

### 6-2 まちづくりにおける住民参加

現在、わが国ではまちづくりにおける住民参加は進んでいないといわれ、住民参加のプログラムが用意されているのは一部の自治体に過ぎない。しかし、大都市のように行政と住民の距離があり、また、行政がまちづくりに対して十分な能力を発揮できる場合には、住民参加のための特別なプログラムが必要とされるのだろう。

一方、古川のような規模の都市で、本研究のメンバーのように様々な事業の委員として施策に意見を述べることでできる機会があり、また、小規模な行政組織では不足している人材を獲得するために必要としているという意味においては、現在でもある部分で住民参加が行なわれていると考えられる。しかし、それはまちづくりに対して関心を持つ一部の住民である。環境に対して意識のより高い住民が育てば、参加の可能性は拡大するのではないかと考えられる。また、大都市においても、住民の自主的な活動が行政に採用されるようになれば、住民参加の道が開けると考えられるし、行政の施策の見張り役としても成長していく可能性がある。そういう意識を持つ住民を育てるために、町歩きは有効な手法であるし、そのためのタウントレイルが考案できるだろう。

現在、古川では住民の様々な代表者一区长、観光協会などの組織、大工などの職人、議員一で組織された景観研究委員会が発足し、景観ガイドプランの策定に取り組んでいる。今後この古川のタウントレイルの活動を蓄積して更に、住民参加の可能性を考察していきたい。

#### 〈研究組織〉

主査	西村 幸夫	東京大学工学部助教授
委員	吉田 桂二	(株)連合設計市谷事務所代表
〃	米山 淳一	(財)日本ナショナルトラスト事業課長
〃	山本 玲子	(財)日本ナショナルトラスト事業課職員
〃	平林 清造	前飛驒の匠文化館館長
〃	内海 良郎	古川町企画商工観光課課長補佐
〃	直井 隆次	直井工務店経営
〃	柴田 駿一	常茂恵旅館経営
〃	駒 侑記扶	駒古道具店経営
〃	加藤 時夫	古川町企画商工観光課課長補佐

#### 調査協力

〃	槌屋 保秀	風絵工房主宰
〃	栗林久美子	東京大学大学院生
〃	窪田 亜矢	東京大学大学院生
〃	村田 英樹	東京大学大学院生

(所属は調査終了時におけるもの)